

東西の学問が交差した雑誌『郷土研究』

——南方，柳田，そして周作人——

The Journal “Kyodo Kenkyu”, a Crossroads of Eastern and Western Scholarship: Minakata, Yanagita, and Zhou Zuoren

子安 加余子

要 旨

本論は、西洋文化を受容しながら東洋文化をいっそう展開させた日中両国の知識人が、20世紀初頭、日本民俗学草創期の記念碑的雑誌『郷土研究』で一堂に「会した」ことの意味を問うものである。

文献資料による文化間の比較を通じて、人類の同質性を示すことを目指した南方熊楠。平民の歴史から国民性の創出を目指し、次第に一国民俗学を確立させていった柳田国男。真誠な民の心の中に国民性の原点を見出し、ひいては民間生活の日常の中に特別な趣を発見した周作人。三者三様のアプローチであるが、彼らは全員が西洋の知的源泉を共有しつつ、西洋の学問手法をそのまま自国に展開させようとはしなかった。なぜなら、彼らの学問の根底に根差していたのは、東洋の学問だったことが要因としてあるからである。三者がそれぞれ民俗学を通じて、西洋の価値観を相対化しながら近代にとって本質的ともいえる問題に向き合おうとしていたことの文化思想史的意義を検討する。

キーワード

『郷土研究』、『ノーツ・アンド・クエリーズ』、南方熊楠、
柳田国男、周作人、『語絲』

はじめに

19世紀後半から20世紀にかけて、中国がバラダイムの転換期にあった頃に活躍した知識人に周作人（1885-1967年）がいる。周作人といえば、兄魯

迅と肩を並べて近代中国の文化思想界を牽引した人物である。1906年から1911年まで日本へ留学した彼は、生物学や人類学をはじめとする西洋近代の学問を広く摂取しており、帰国後、国民（Nation）の形成を目指して、中国民俗学の分野でも創始者の1人として活躍した¹⁾。

国外で西洋の学術思想に触れる機会を得た周作人だが、中国の伝統的な士大夫階級は、経書や歴史書に親しむことで自らの教養を養い、立身出世の道を開いてきた歴史がある。ちょうど科举制度廃止（1905年）前に生を受けた周作人もそうした伝統的学問の素養を十分に身につけていた。だが周作人は、科举文体である八股文の批判に顕著なように、精神の自由な発露を奪う文体やその背景に横たわる専制政治を一貫して嫌った。彼の文化批判の根底に近代科学に裏打ちされた新しい西洋の価値観があったことの証だが、もう一方にはいわゆる四書五経といった正統学問の系譜とは異なる書物群から得た博物学的知の系譜があった。「雑記」や「随筆」とよばれるものである。周作人にとってこれらの書は、民俗学を中国に伝播発展させていく際の原動力になっていたもので、彼は中でも明代文人の地誌雑記や風土誌を好んだ。幼いころからこれらの書に親しんだ様子を次のように語っている。

中国の旧書は史部地理類に雑記という一門があり、性質はとても特別で、もともと歴史の資料であるが、文芸的な趣の豊かなものが多い。小冊子のものが多いが、長らく文人に愛読され、比較的広く伝播した。（中略）この類の書物に記されているのはたいてい一地方の古跡伝説、物産風俗で、その内容は目新しくて喜ばしいばかりか、もし文章がよいとなると、しぜんと人をひきつける。しかも述べるのがある一地方の事なので、内容はもとより統一が取れやすく、さらに読者に郷土愛を感じさせる。これは多くの地理書を読んだ時には得られないもので

ある。(「十堂筆談 九 風土誌」²⁾)

周作人は続けて、具体的に評価する地誌雑記を挙げていく。「材料がよく、内容がよく、あるいは文章がよい」もの、その1つ目は晋の『南方草木状』、唐の『北戸録』、『嶺表録異』など博物学に準じるもの。2つ目は、宋の『東京夢華録』、『夢梁』、明の『如夢録』、『陶庵夢憶』など、昔年の風景を述懐して民間の生活を描写したもの。3つ目は明末の『帝京景物略』、清末の『燕京歲時記』といった、故郷あるいは第二の故郷への愛着を語ったもの。こうした「卑俗」で「荒唐無稽」ともいえる民間の記録は、風雅な文人士の取り合わないものばかりだが、周作人は一見して瑣末で質朴なところにも新たな価値と生命を見出して好んだ。その感慨は1930年代以降、主に明清文人の読書筆記を発表する中でたびたび語られていった。その意図するところは何か、「十堂筆談」で語る次の言葉に注目したい。

私の本意は実は彼らを誘うこと、そうだ、正直に言えば彼らを誘って民俗研究の方面に進ませて、この辺鄙な小道に何人かでも道行く人を増やしたいのだ。専門に歴史地理をやる人は言うまでもなく、我々が頼もうとは思わない。もし他に誰か中国人の過去と未来にすこぶる関心を寄せる人がいるなら、どうか彼らに史学の興味を、低く、広い方面に向けて欲しい。雑記を読む時から廊廟朝廷を離れ、田野坊巷の事にもっと注意を向けて、だんだんと田夫野老と接しながら、国民生活の歴史研究に励んでもらいたい。これはたとえ寂寞なる学問であっても、中国にとって重大な意義を持つものである。(「十堂筆談 九 風土誌」³⁾)

田野の学問である民俗学にとって、「雑記」がその知的源泉になり得ると

示唆する内容だが、「十堂筆談」で挙げたものの他に周作人が生涯にわたって言及し、高く評価した書物があった。明末文人謝肇淛しやちやうせつの『五雜俎』である。明の文人が国家の故事や風俗習慣を書き留めたものを多く残している中において、『五雜俎』は「諸方面を包括し、高度な学術的思考から世俗の卑近な諸事情に至るまで、細やかに記しているのであって、隨筆類の中での傑出した存在」⁴⁾としてとりわけ名高い。明末という時代を一種の思想と文章の「解放の時代」⁵⁾ととらえた周作人であったから、『五雜俎』も同様の文学史観の中で位置づけていたと考えられる。

『五雜俎』について、周作人の言葉を引きながら内容をみると、「全書五部に分かれ、天部が二巻、地部が二巻、人部、物部、事部がそれぞれ四巻である。そのうち私が最もおもしろいと思うのは物部である。物の種類が非常に多く、人の注意をひきやすく、随所随事に物事の本質を極める努力が見られる。博識・新知識はむろん貴重だが、ごく普通の記述であっても観察がはっきりしていて、文章が簡潔ならばまた復唱にたえる。自然の事物を書いた小文はもとより少なく、優れたものはさらに得がたいものだ」(「『五雜俎』」⁶⁾)。特に周作人が興味を覚えた物部は、鳳・麟から象・熊・猿に関する異聞のほか、鳥類魚類への言及、花木・竹・芝・牡丹・菊といった植物類、また茶や酒、人参などの本草に及び、変わって文房四宝から女性の脂粉、ひいては音楽に至るまで取り上げる。その内容は実に多岐にわたり、全体を俯瞰しても博物学的な要素に彩られているといつてよい。

実は周作人が「自然の事物を書いた小文」の最高傑作と認めたものは、英国のギルバート・ホワイト著『セルボーン自然史』⁷⁾、つまり西洋の博物誌だった。この『セルボーン自然史』と比肩はできないものの、中国にも古くは唐の『酉陽雜俎』ゆうようざつそ(段成式作、全30巻)があり、その次に『五雜俎』があつて、我々普通の人間の知識欲を満たしてくれる良書だと評価するのだった。中国における博物学は、もともと物名に即して物の意味を解釈する

名物訓詁の学として起こったもので、その歴史は古い。主に典籍や文献を紐解いて、植物や動物、さらには風俗にわたる物事の本源に遡るこの学問は、東洋で展開された考証学である。周作人は、西洋の博物学を求めながら東洋の名物訓詁の学にも共鳴しており、民俗学と博物学といった境界を不問にした。言い換えれば『西陽雑俎』や『五雑俎』が、民俗学における多識の学の要素を十分満たしていると感じて、歡喜讚嘆したのであろう。

同じように、民俗学と博物学といった近代学問の垣根を越えて『西陽雑俎』や『五雑俎』に親しんだ人物が日本にいた。南方熊楠(1867-1941年)である。南方の博物学は非常に多方面にわたるが、秩序だった論理的思考がみえないという評価がある一方で、「境界を設けず、あらゆるものを横一列に網羅する南方博物学」⁸⁾に、日本の近代と東洋との関わりを見出して、再評価する動きもある。「明治という年号の始まる前年に生まれた熊楠にとって、物を考えていく根元にあったものが江戸時代の文化、ひいてはそこに大きな位置をしめる中国の文化であった」⁹⁾という指摘の通り、東洋の知的営みに深く共鳴していた南方熊楠という明治の知識人は、文化の源流である中国文化に対する理解を基礎に西洋文化を受け入れていった人物だった。この、西洋文化を受容しながら東洋文化をいっそう展開させた日中両国の知識人が、20世紀初頭、1つの雑誌で「交わる」こととなる。それは、日本民俗学草創期の記念碑的雑誌『郷土研究』だった。

『郷土研究』は日本(柳田国男)民俗学の胎動期にあって、重要な役割を果たした雑誌である。『郷土研究』に対して、留日中より柳田民俗学に関心を寄せていた周作人は、帰国後にバックナンバーを取り寄せ、その後も購読を続けた¹⁰⁾。柳田国男(1875-1962年)より年長で柳田のよき相談役だった南方は、理想とする民俗学雑誌のあり方を柳田に教示した。3人の日中知識人がそれぞれ期待を寄せ、あるいは関わった『郷土研究』は、中国と日本、さらには東西の学問が展開する可能性を秘めたものだったのではな

いだろうか。本論は、民俗学に近い日中文化人の『郷土研究』に対するアプローチのあり方、及び『郷土研究』が担った文化思想史的役割を考察していくものである。

1. 『ノーツ・アンド・クエリーズ』から『郷土研究』へ

柳田国男と高木敏雄（1876-1922年）による日本で最初の民俗学専門誌『郷土研究』（月刊）が創刊されたのは1913年3月である。柳田と南方が文通を開始するのがその2年前の1911年3月。その前年には自身の学問の方向性を模索していた柳田にとって、1つの転換期となる『石神問答』、『遠野物語』の二書が刊行されているから、『郷土研究』の出現はまさに日本民俗学が本格的に始動したことの象徴でもあった。

南方熊楠が14年間にわたってアメリカ、イギリスに遊学したことはよく知られる。彼は1892年に渡英した後、主に大英博物館閲覧室にこもって古今東西のさまざまな言語で書かれた民俗学、博物学の資料を渉猟しながら、日夜研鑽を積んだ。南方の博学は、いかなるアカデミズム機関にも属することなく得たものといえる¹¹⁾。19世紀末のイギリスはロンドンといえば世界の中心都市で、近代的な学問が次々と生まれ育っていく場所だった。その地に降り立った南方は、イギリスのA・ラングや、『金枝篇』で有名なJ・G・フレイザーといった、ヨーロッパで最新の社会人類学研究の動向を肌で感じながら学んだ¹²⁾。日本でフレイザーが注目され始めるのも1911年頃のこと。柳田国男が南方の助言を得て、11巻からなる『金枝篇』第三版を読み始めたこともよく知られた話である。さらには周作人も日本留学中に、ラングやフレイザーの理論を受容して、自身の文学観を形成しているから（神話学者・高木敏雄は言わずと知れた日本におけるラング研究の第一人者である）、『郷土研究』を主導した知識人たちがヨーロッパ近代の最新の学問を広く理解していたことは重要な点である。

南方が遊学生活に終止符を打って帰国するのが1900年10月、『郷土研究』の創刊に至るまではなお10年ほどある。その間、和歌山に帰郷した南方は、那智山中での生活を経て田辺市に定住する中で、粘菌類の採集と図譜作りに没頭しながら旺盛な英文論考を執筆した。それらは帰国以前より寄稿していたイギリスの『ネイチャー』と、『ノーツ・アンド・クエリーズ』（以下『N & Q』と記す）に掲載された¹³⁾。

南方の2つの英文学術誌への投稿はロンドン時代に遡るが、1893年10月5日号（48巻1249号）に「東洋の星座」が初掲載された『ネイチャー』の方が一足早い。『ネイチャー』といえば現在では自然科学の最高峰として名高い雑誌だが、モースによるカニバリズム論争が展開されたことが示すように、創刊から1930年代頃までは考古学や民族学に関する投稿も歓迎された。学問が次第に体系化・制度化の道をたどる前の過渡期にあって、近代的枠組みに縛られない学風の中で、南方はその後も「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」（1893年10月12日号、48巻1250号）、「蜂に関する東洋の俗信」（1894年5月10日号、50巻1280号）、「コムソウダケに関する最古の記述」（1894年5月17日号、50巻1281号）等、東洋の科学史や生物学、植物学関連の論考を次々と発表した。こうして『ネイチャー』に一定の活躍の場を得ていた南方だったが¹⁴⁾、興味関心分野が説話や民俗へと広がるにつれ、他にも発表の場を求めていく。そんな折、帰国を目前にした1899年に寄稿し始めたのが『N & Q』という雑誌だった。帰国後になると、自然科学系は『ネイチャー』へ、民俗に関連するものは『N & Q』へと住み分けが明確になっていき、『N & Q』への寄稿が圧倒的に多くなる¹⁵⁾。それは南方の研究の方向性と連動するものだった。

『N & Q』は1849年、イギリスのウィリアム・ジョン・トムズが創刊した人文科学の総合学術誌ともいえるもので、副題に「文人、芸術家、好古家、系図研究者、その他のための情報交換誌」とある通り、投稿による質疑応

答が全誌面を埋めるという、読者に広く開かれた異色の雑誌だった。トムズといえば説話や民間風習など、ヨーロッパにおける古俗の総称として「folklore」なるタームを生み出したことでも有名だが、彼自身編集長となった『N & Q』の扱う分野は、文学、民族、語源、人類学、動植物学など多岐にわたった。南方が投稿を開始する時期は、『N & Q』が最も活況を呈していく頃にあたる¹⁶⁾。実は南方が『N & Q』に発表した324本にのぼる論考についての研究は、量質ともに研究の重要性が指摘されてはいるものの、順調に進んでいるとはいえない。その理由は、彼の扱う内容が広く雑多だったこともあるが、雑誌のスタイルにもその要因があった。南方が「ノーツ・随筆エンド・キークリス問答雑誌¹⁷⁾」と名付けた通り、『N & Q』では質疑応答を幾重にも重ねて議論が展開されるという手法が支持されていたため、南方1人の論考だけを切り取って研究するわけにいかず、非常に丁寧に雑誌を紐解く作業を必要とした¹⁸⁾。言い換えれば、そこにこそ『N & Q』誌の最大の特徴があった。

『N & Q』の独特なスタイルとは、誌面を大きく3つの部分「ノート」、クエリー、「リプライ」に分けるもので、このスタイルは創刊から1920年代まで、つまり南方が投稿していた時期まで継続した。投稿者の知識や情報、事例から学術的な論文に至るまで、長短さまざまな文章を掲載するのが1つ目の「ノート」。情報提供を読者に呼びかけるための欄が2つ目のクエリー。こちらは短文が多かった。そして、クエリーへの返答を掲載したのが3つ目の「リプライ」。リプライは長短さまざまで、1回で終わらず数回以上にわたって論が展開されることもあり、南方もリプライに投稿することが一番多かった。

『エンサイクロペディア・ブリタニカ』等各種事典の編纂において、多くのアンティカリ（好古趣味の人たち）が重要な情報源として活躍する伝統からみても、17世紀以降のイギリスにはアマチュアの素人博物学者が多数存在していたし、彼ら自身も研究者との接点や活躍の場を欲していた。そう

した人々も加わって、Q&A方式で蓄積されていく世界中のデータはまるで一種の百科事典的情報の宝庫といった様相だった。

例えば南方がイギリス時代の最後の方で連載を開始した「神跡考（神々の足跡など）①～⑤」¹⁹⁾は、巡礼や旅行の記念として残された足跡の事例が「ノート」に掲載されたのを機に、数々のリプライが寄せられ、次第に神や聖人の足跡に関わる伝説へと議論が展開される中で執筆されたものである。すでに大英博物館での筆写を通じて各国の民俗を比較する手法を身につけていた南方は、「神跡考」でもその手法を遺憾なく發揮した。彼は超自然的存在の足跡を求めて、北アメリカ先住民の伝承はじめ、古代メキシコ、ブラジル、フランス、ローマ、ギリシアから、古代エジプト、セイロン、さらには太平洋諸島と世界各地を縦横に駆け巡って数々の事例を披露した。1つの議論に接し、反応（対抗）して、新たな事例を追加するという対話的な記述は、事例を学問的に論じていこうとするものではなかった。だが『N & Q』での経験が大きな糧となり、南方は問答形式で事例を列挙していくことが、ひいては物事の全体を理解する助けになる、という学問スタイルを確立していくこととなる。

こうして生まれた南方の手法は、もともと彼の学問的素地にあった中国古来の博物学を展開させて編み出した考証学的学問スタイルともいえるもので、たとえそのスタイルがいわゆる問題提起から論理的証明を経て結論に至る、といった近代的ロジックに拠らないものだったとしても、博識を駆使したアナロジーを次々と提示された読者は、しぜんと多面的な視点の重要性に気づかされていったことだろう。日本の民俗学界が雑誌を創刊するに際して、南方は何より『N & Q』で繰り広げられた知の交流を紹介し、その意味を説いていくのだった。

南方と柳田の文通は、「民俗学」がまだ「学」と呼べるような段階にはなかった明治末から大正初めの頃、『東京人類学会雑誌』に掲載された南方の

「山神オコゼ魚を好むということ」(26巻299号, 1911年2月)を読んだ柳田が、南方に手紙を書き送ったことに始まる。「オコゼ」に関心を寄せていた柳田は南方論考との邂逅を喜んで、自らの山男への関心から南方へ助力を求めたのだった(1911年3月19日付南方宛柳田書簡)。一方、南方はその求めに十分応える形で豊富な資料を提供するだけでなく、『石神問答』、『遠野物語』に関わる補足資料的読後感を寄せて返答した。約6年間にわたる両者の書簡のやり取りをみれば、その後の柳田民俗学にとって南方の存在がいかに大きいものだったかを確認することができる。南方にとってもそれは同じで、加えて時の役人だった柳田の知遇を得たことで、彼を神社合祀反対運動における恰好の援助者と見込んで協力を仰いでいる。両者は互いの研究や活動における最大の協力者を得たといえよう。

文通を開始して3か月が過ぎようとする頃、南方は柳田に欧米、特にイギリス民俗学の状況を伝えながら、日本でも民俗学会のような組織を作る必要性と、雑誌を出すなら『N & Q』をよきモデルとするよう勧めた。

欧米各国みな Folk-lore Society あり。英国には G. T. Gomme もっともこのことに尽瘁し、以為く、里俗、古譚はみな事実に基づけり、筆にせし史書は区域限りあり、僻説強牽の言多し、里俗、古譚はことごとく今を去ること遠き世に造り出されしものなれば、史書に見る能わざる史蹟を見るべし、と。その著書多般なれど、みな里俗、古譚によって英国人民發達の蹟を考へたるなり。今年始の慶賀に、今皇、特にその功を賞し、男爵を授けたり。小生自身は従来ハーバート・スペンセルや福沢氏の説を固守し、何の学会にも属せざるも(中略)、わが国にも何とか Folk-lore 会の設立ありたきなり。また雑誌御発行ならば英国の 'Notes and Queries' (中略) ごときものとし、文学、考古学、里俗学の範囲において、各人の随筆と問と答を精選して出すこととしたら、

はなはだ面白がるべしと思う。(1911年6月12日付柳田宛南方書簡²⁰⁾)

南方のアドバイスからおよそ1年後の1912年、柳田は民俗学会の方はひとまず先送りにして、専門雑誌の準備に取りかかる。その間、両者は民俗材料の取り扱い方の違いから、研究スタンスを率直に批判し合うようなやり取りを交わした。例えば柳田から、「『神跡考』はあまり材料多くかえりて向う人にはわかりにくくなり、おしきものに候。小生のものならこうも書いて見たいと思う所多く候」(1911年10月8日付南方宛柳田書簡)と文章の煩雑さを指摘されるや、南方はすぐさま「実際この考説はもっとも論理の順序を踏んで序したるものにて複雑にあらず」と応え、「日本人の世界研究者」(10月17日付柳田宛南方書簡)たる自負を見せつけている。

一方、南方の方では柳田に向けて、「言語をもって里俗、土風、その他人間一切の事相を説くは、はなはだ手軽きやり方なり」(1911年10月10日付柳田宛南方書簡)といった批評を数回にわたり書き送り、柳田の言辞偏重の考証スタイルを鋭く批判した。こうした方法論上の齟齬はその後次第に表面化し、やがては相互批判の応酬から文通の途絶に至る(2人のやり取りは『郷土研究』休刊とほぼ同時に終了する)というストーリーを生み出すのだが²¹⁾、忌憚ない意見の交わし合いはむしろ、しばしの協力関係を築く上で、ひいては日本民俗学のあり方を見つける上で必要なプロセスだったとみえる。

また、双方の頻繁なやり取りから、両者にはある共通点があったことがわかる。柳田民俗学が実地に即して調べていくという手法を実行に移すのはもう少し後のこと。20世紀初頭の頃の柳田が伝承資料を集めるにあたり依拠したのは、徹底して文献資料だった点である。柳田が中でも一目置いていたのは、地方に残る風土や習俗を記録した近世文書だった。

耳を賤しみ眼を重んずることは大抵よからず。しかし、北欧の民俗

学者のごとく炊器と縫針とを背囊に入れ天下を行尽するも、今の世に当たりては得るところ幾何かあらん。書物にももちろん価値の差等あり。俗誌志、里人談の類は伝聞と誇張と多く、古人すでにしばしばその誤を正せり。されども一郷の篤学が生涯を費やして蒐集せる風土志中の古伝は、わずかに今を去ること百年前なりとも、今日の俚談に比して量も質もまされる。(中略)

なるべく地方の風土誌を精読し、かつ甲乙の書の価値を批判するにはもっとも嚴重なる秤を有せり。故に書物ばかりから書物をつくることをもさのみむだとは思わず。(1911年10月13日付南方宛柳田書簡²²⁾)

フィールドワーク(当時の手法は西洋近代のものではない)のように、自分の耳で眼前の平民から資料を採集するより、地方の風土誌を重んじる柳田の姿勢はまるで、英国民俗学会が隆盛を極めた19世紀末のロンドンに滞在しながら、研究手法の根本に近世の随筆の影響がみられる南方と一脈通じるものを感じ取ることができる。さらにいえば、柳田・南方の姿勢は、彼らと同様にラングやフレイザーに通じながら、一方で中国の「雑記」の中に民俗学に資する要素を見出していた周作人とも共鳴し合う部分だった²³⁾。周作人が『郷土研究』に注目していく理由の一端はそこにもあったといえる。柳田・南方・周作人という、それぞれ西洋近代の民俗学に学んだ日中文化人たちが、自国の民俗学研究を開始するにあたり等しく江戸以来の考証学や、その源流である中国(アジア)の学問を拠りどころにしていた点は注目に値する。

1912年、年が明けると同時にいよいよ雑誌創刊の準備が本格化する。1月17日付柳田宛南方書簡で改めて示された「わが国にも独立して俚俗学 Folklore Society の建立ありたきことに候」という願いに応えるかのようにして、柳田は次のように述べている。

フォルクロアの学会は今年は打ち立て申すよう、乏しき有力者連を説きおり候。しかし、雑誌の方はまずもって誘導的任務に力を注がねばならぬ故、小生は会報として体面その他の拘束をうけぬよう独立して発刊させたく存じおり候。よって貴下御入会は御いやにても、雑誌の方にはたくさんの助力を与え給わりたく候。信仰生活以外にも広く日本田舎の生活状態を研究し、新しき題目を提供する雑誌としては、何か適切なる名称は有之まじくや、御考え下されたく候。(1912年2月9日付南方宛柳田書簡²⁴⁾)

同じころ、柳田は『郷土研究』の創刊準備に欠かせない人物と出会っていた(1911年11月)。高木敏雄である。柳田の依頼を受けた高木は、後に編集作業の実務をともに担うこととなる。翌1912年1月以降、柳田から紹介されて、南方は高木とも文通を交わし始めた。両者のやり取りをみると、当時すでに日本や中国の神話研究で新境地を開拓していた高木は、9歳年長の南方にたびたび説話の比較研究に関する教示を仰いでおり、南方もその都度、数々の資料を提供して高木の熱心な要望に応えている。そうした過程で南方は、「スウェーデンのMoaと、今一人と終始一致して、その全国のお話を集めたる大著述あり。実に見事なものなり。小生は何とか貴下と協力してかかるもの編みたく存じ候」²⁵⁾と書き送っている。南方が高木を共同研究に誘うほど、両者は一時期密接な関係を築いたようだ。この関係は『郷土研究』創刊後も継続し、南方が陰に陽に後進のために一役買っていたことがよくわかる²⁶⁾。3者の関係を柳田側から眺めれば、南方は助力を仰ぐ先達であり、高木は具体的な編集作業の協力者だったから、『郷土研究』は実に柳田・南方・高木の力が結集して誕生したものだといっていだらう。

南方の再三にわたる働きかけが功を奏して、『郷土研究』に質疑応答形式

の欄が導入されることとなる。創刊号（1913年3月10日発行）については、「初号のみは編者二人にて全部を作る考え」（1913年2月5日付南方宛柳田書簡）に従い、柳田・高木がいくつものペンネームを駆使して誌面を埋めた。こうして雑誌に一定の方向性が示された。創刊号の構成は論文ほか各欄が設けられており、「資料及報告」欄とは別個に作られた「小篇」欄（5編掲載）はさながら「ノート」に、「紙上問答」欄（質問6件）は「クエリー」、「リプライ」に相当すると思われる。その証に、「紙上問答」冒頭には、「一度掲載した質問に対しては永久に應答を歓迎す」という注意書きが付されており、『N & Q』が念頭に置かれていたことを示唆するものだった。

第1巻第2号以降になると、「紙上問答」での「問」と「答」は内容が合致するよう番号が付され、読者の便宜がはかられた（毎号5、6件、年間6、70件の質問が累積され、回答は順不同に到着したものから適宜掲載された）。最初こそ、「問」と「答」の常連として柳田と南方の名前が目立つが、次第に関係者や一般読者も情報交換の輪に参加するようになっていく。その1つを紹介する。

問（71）で出された質問は、「何れの地方でも燕は至つて捕へ易いにも拘らず之を殺さぬやうである。其理由はまづくて食へぬからと云ふものもあるがそればかりではあるまい。其理由を御存じの方は是非御一報を乞ふ（大野芳宜）」（第2巻第2号、1914年4月）というもの。回答として寄せられたものの4件は、第2巻第4号に（1914年6月）掲載された。うち3件は一般読者からの回答で、郷里に伝わる燕に対する信仰や伝説を伝えている。どれも「燕を捕獲すると目が潰れる」という内容で大筋一致しており、内容も簡潔なものだった。4件目は南方の回答で、イタリア、ドイツ、ロシア、中国、さらには古代バビロニアといった、世界規模で燕にまつわる風俗や信仰を披露したものだった。実に南方らしい文章で、彼による学際的な回答を他の読者がどう受け止めたかわからないが、質問者（大野芳宜は、実は柳田国

男のペンネーム)は詳細かつ周到な回答を得て喜んだことだろう。

客観的にみて、たとえ『N & Q』をモデルにしても、ロンドンと東京では読者層も文化的背景も異なるため、『郷土研究』が柳田周辺を越えて一般へ広がりをもたらすのは容易なことではなかった。『郷土研究』に『N & Q』の手法が根付くこと自体は難しかったが、一方で、研究者と現地の情報提供者を繋ぐルートといったものが次第に確立されていく。そこに柳田民俗学が後に作り上げていく資料収集のための、日本全土を網羅するネットワークの雛形を見出すことが可能かもしれない。だが創刊から1年後の1914年4月に高木が『郷土研究』を去り、実務の片腕を失ったことで雑誌は窮地に陥る。それ以降は柳田の1人編集時代に入ったため、柳田はよりいっそうの助力を南方に求め、南方側も執筆という形でそれに応えている。南方は論文に加えて「小篇」欄への投稿、さらには「紙上問答」で精力的にリプライし続けることで、ロンドン時代と同じ熱意を以って『郷土研究』を支え続けたといえる²⁷⁾。

いま一度、資料収集という点で『N & Q』や『郷土研究』を振り返れば、雑誌がその役割を担うに相応しいメディアだったことは明らかである。それに加えて、新たな学問(民俗学)を生み、育てる場として機能した点からみても、雑誌の役割をクローズアップすることの意味は大きい。南方や柳田以外にその点に気づいていたのが、周作人である。彼は留日中に日本民俗学の胎動の息吹を肌で感じていた。『郷土研究』に関心を寄せ続けた周作人は、帰国後、中国民俗学研究を推進する上で雑誌の役割に注目しており、自ら編集した雑誌で民俗資料の収集方法を探っている。周作人の活動の中に『郷土研究』から引き継いだ部分はどこにあったのか、その意味するものは何かを次に検討する。

2. 『郷土研究』から『語絲』へ

周作人と柳田国男の出会いは一一般に『遠野物語』に始まるとされる²⁸⁾。『遠野物語』が刊行されるとすぐに本郷の販売所に足を運んで購入した周作人はその後も、「柳田国男の著述は、ふだんから留意して探し求めているので、もうほとんど入手した」²⁹⁾。その過程で周作人は、「いにしへの伝統の詩趣が今日の都会の生活ではふつつり切れて、次の世代の国民に受け継がれないまま終わる。また平民の心情は重視されず記録も残らないため、言語文章の使い方には厳しい制限があった」³⁰⁾という柳田の指摘に共感を寄せた。柳田の主張の前提として、『郷土研究』の編集方針をめぐる南方との議論の中で、彼は次のように明言していた。

「平民は如何に生活するか」又は「如何に生活し來つたか」を記述して世論の前提を確實にするものが此までは無かつた。それを「郷土研究」が遣るのです。(柳田国男「南方氏の書簡に就て」(『郷土研究』第2巻第7号, 1914年9月, 46頁)

消えゆく平民の生活を記録することは民俗学研究にとっても欠かせない作業であるが、柳田はその後も『郷土研究』誌上で、平民の歴史なくして国民の性質は知り得ないことを何度も訴える³¹⁾。そうした姿勢を通じて、柳田の中でいかにして実証的に国民性を明らかにするかという命題が徐々に明確化されていく。

周作人の民俗学は柳田とは異なり、日本留学中に西洋近代文学史観を受容することで形成された文学観に基づくものだった。周作人にとって何より大事なのは、文学の源にある原始的想像力や「心の声」をさがして、そこから国民性を見出していくこと、ないしはそこから見出された国民性を

あるがままにとらえることだった。日本と中国の知識人がそれぞれ自らの国民性とは何か、という近代の問題を民俗学からアプローチしたといえるが、両者の考え方には明らかに温度差がある。だが一方で、すでに中国の地誌雑記を通じて民俗学との接点を得ていた周作人が、平民生活の記録の空白を憂慮する柳田に共鳴したとしても不思議ではない。さらに、中国における民俗学研究の初期においても、まずは失われつつある民俗資料を集めていくことが不可欠だった。周作人の民俗学形成に柳田民俗学の影が色濃いのは、民間資料収集の精神や手法の面で学ぶべき点があったことにもよる。柳田から得たものを周作人はどのようにして実践したか、そこに南方(『N & Q』)流の手法に通じるものはあったのか、周作人も編集に参加した雑誌『語絲』³²⁾からみてみよう。

『語絲』は1924年11月17日に北京で創刊された週刊誌である(停刊は1930年3月10日)。中国における近代民俗学的な関心は、近代国家の形成を達成する以前から生じていたが、その後、新時代(五四新文化運動)の到来と同時に組織的な活動が試みられ、民俗学運動は次第に中国の学術思想界において影響力を行使するまでに発展する。『語絲』は民俗学運動の開始後少し経ってから創刊された雑誌だった。また従来『語絲』といえば、現代評論派や革命文学派との激しい論戦を通じて形成された「語絲派」のイメージが強いが、それは『語絲』の一面に過ぎない。もう1人の主な編集者だった魯迅が、「『語絲』で論じられていることは、その多くが他の雑誌では論じようとはしない、論じる勇気がない、あるいは論じられないものなので」³³⁾と述べたように、寄稿者(その数は約5年間で620人にのぼる)にとって、『語絲』は特定の主義主張に拠らない、自由な言論を発信できる「開かれた」雑誌だった。それを示す例として、民俗学に関連するものを1つ紹介する。

中国における実質的な民俗学活動の発端は、北京大学で開始された歌謡

の収集だった。収集開始後まもなく歌謡研究会（1920年）が作られ、機関誌『歌謡』が創刊される（1922年12月）。研究会の主任だった周作人は当時を回想して、自分が研究会に貢献したのは「猥褻な歌謡」への関心を喚起したことだと述べた点に注目できる（「一点回憶」、『民間文学』第6期、1962年12月）。実は『歌謡』創刊にあたり作成された「簡章」をみると、原案には「征夫野老、遊女怨婦の辞の、淫褻に涉らないで自然に趣を成しているもの」という制限がついていた。それに対し、周作人は制限の撤廃を提案し、代わって「歌謡の性質は無制限とする。たとえ迷信や猥褻に関わるものでも研究の価値があるので、合わせて記録送付すべきである。あらかじめ寄稿者が選択を加える必要はない」³⁴⁾と改めた。同様の趣旨は『歌謡』「発刊詞」（起草者は周作人）で、再度主張された内容でもあった。周作人の回想はこのあたりの事情に言及したのだろう。実際のところ、知識人からの理解が乏しい中であって、『歌謡』誌上で「猥褻な歌謡」を収集するのは困難を極めた。だが諦めなかった周作人は、今度は自ら創刊に携わった『語絲』でもう一度呼びかけ（「徵求猥褻的歌謡啓」第48期、1925年10月）、とうとう実現をみたというわけだった³⁵⁾。

『語絲』に掲載された文章をジャンル別にみると、特に周作人編集時代はいわゆる雑文（短文）が6、7割を占めている。寄稿者の多数を占めた無名の作家や一般読者は、第5期から開始される「通信」欄で周作人と直接やり取りをしていく。その他に彼らの多くが投稿したのは、周作人が作った以下の欄であった。

- ・「我們的閑話」（「私たちの閑話」）（計30編、第71期～90期）
- ・「大家的閑話」（「みんなの閑話」）（計11編、第91期～98期）
- ・「閑話集成」（計64編、第102期～120期）
- ・「閑話拾遺」（計55編、第121期～140期）

これら雑文欄は、身の回りの個人的な疑問から社会問題に至るまで、さまざまな意見が寄せられており、まさに情報交換の場として機能した。むしろ、編集者が寄せられた原稿を雑文欄に振り分けて掲載したという意味では、周作人の意図的な誌面作りの結果ともいえる。その効果は民俗資料の収集面にも表れ、「猥褻な歌謡」を手始めに、読者の郷里に伝わる伝説や昔話が周作人のもとに集まり始めていく。その1つが、谷万川の『大きな黒いオオカミの話』だった。

当時北京師範大学附属中学の学生だった谷万川が周作人宛に送った手紙は、「大きな黒いオオカミの便り」と題され、『語絲』52期に周作人の返信と一緒に掲載された。周作人の返信によれば、送られた前半と後半は別の話ではあるが、現在流通する形式であればむしろそのまま保存すべきである。原稿は実によく記録されているが、長すぎてすぐの掲載ができないとある³⁶⁾。これをきっかけにして、谷万川はその後も昔話などを記録しては周作人に書き送った。周作人と谷万川の関係は、『郷土研究』でいうところの研究者と現地（地方）の資料提供者による協働に近い。柳田は後になって、地方の民俗を研究するのは現地の人の方がふさわしいとする立場を取るが、『郷土研究』でもそうした手法が垣間見えていたし、実際のところ地方と中央を繋ぐルートをあちこちに作りながら、例えば『遠野物語』の語り部・佐々木喜善のような後進を何人も育成していきのだった。谷万川も周作人が発掘した人材であったといえるから、後進のために尽力する周作人の姿は柳田に通じるものがある。周作人の以下の『郷土研究』評価は、それゆえのものといえよう。

私の雑覧は日本方面から得たものも非常に多い。これは大抵が日本に関する事で、少なくとも日本を背景とする。つまり場所としての色合いを持っており、西洋のものが単に学問上の関係だけなのとはやや

異なる。例えば、民俗学はもともと西欧に源を發しており、神話伝説研究と文化人類学を涉獵していると、いくつもの（西洋と日本が）交差するところに出会うものだ。だがいま日本の『郷土研究』を取り上げるのには、単に両者の学風がいささか異なるからだけではなく、別に理由がある。『郷土研究』が刊行された初期は、南方熊楠の諸論文のように、古今内外の文献から引証する手法がもともとの古い民俗学の道だったが、柳田国男氏の主張が次第に確立され、国民生活の史的研究となり、名称もまた民間伝承に帰結した。（周作人「私の雑学14」³⁷⁾

以上の引用にある、「古今内外の引証」は方法論として西洋に通じた「もともとの」民俗学の道であり、それを引き継いだものとして、南方流の手法を位置づけている。さらに、そうした南方流の手法から、『郷土研究』を通じて柳田流の手法が発展的に展開されたと論じており、周作人が意図的に南方流の手法を採用しない立場を取る可能性さえ垣間見える。しかしながらその一方で、「古今内外の引証」を必要とする中国民俗学研究が『語絲』で展開されつつあった。「古い民俗学の道」を必要とし、かつ成功させていった立役者は、周作人の弟子の1人・江紹原（1898-1983年）であり、彼を中心に『語絲』では、1つの資料が別の資料の呼び水となり、新たな資料が追加され、ついには全体を網羅する考証資料が蓄積されていく。

江紹原といえば周作人と二人三脚で中国民俗学運動の初期から共に活動した人物である³⁸⁾。五四新文化運動前夜の北京大学に居合わせた江紹原は、シカゴ大学やイリノイ大学大学院でそれぞれ宗教学、哲学の研鑽を積んだ。1923年に帰国した後、弱冠25歳で北京大学哲学系教授に就任し、その翌年、師と仰ぐ周作人と『語絲』誌上で交わし始める書簡（「礼部文件」³⁹⁾と呼ばれた）を契機に、古今の礼の探究を開始した。また欧米圏の民俗学にも詳しく、特にイギリス民俗学を中国に紹介する上でも大いに活躍した。以後、

江紹原の研究対象は宗教を含めた民俗学へと大きく拡大された。その1つとして有名なのが彼の迷信研究であり、関連する資料中心の短文シリーズを「小品」と題して次々に発表した。

「小品」が扱った内容は実にさまざまで、血液、命名、身体、性愛、医薬などにまつわる民間の迷信を主としたが、注目すべきはこのシリーズを収集するため江紹原が活用したのが、『語絲』を中心とするメディアだった点である。江紹原は次第に「小品」を、読者から提供された資料を発表する場として位置づけることで、多数の読者に支持されていった。その結果、1920年代後半から1930年代にかけて発表された「小品」は、現在わかる限りで550編にのぼった⁴⁰⁾。「小品」が相当数発表された後、江紹原は改めて「小品」を文芸作品や随筆とは区別し、古今の迷信、礼俗と宗教に関する資料であること、さらにそれらを雑誌や新聞に掲載する目的を次のように述べた。

私は少しでも人々に迷信や礼俗に対する興味を引き起こし、それ（雑誌や新聞のこと：筆者注）を借りて各人の知っている性質の同じか、似ているものを書き出してもらい、数多くの人々の研究に供したい。過去の経験からみれば、小品は確かにその目的に達することができた。（「小品144 移過：移病（Transference of Evil）」『語絲』第155期，1927年11月）

例えば『語絲』に、第108期から設けられた「大家的小品（「みんなの小品）」欄をみれば、江紹原のねらいが見事に実を結んでいたことがわかる。『語絲』ではそれ以降、彼に端を発した古代の婚礼や風俗に関する発言が、読者の補足により議論の深まりをみせていく（『語絲』第122, 123, 127, 131, 140, 145期他）。これら読者からの反響は、江紹原からの積極的な働きかけによるが、「小品」シリーズは次第に一定の読者を獲得し、読者から江紹原

へ問題解決の糸口を求める声まで起こるようになる（『語絲』第140、143期他）。

「小品」シリーズに限らず中国民俗学に関する初期活動において、資料収集の必要性が強く説かれたことはすでに述べたが、江紹原の活躍はそれだけではなかった。例えば『語絲』で開始された彼の発言に始まる各議論（「雨乞い」、「閨房（婚礼の晩、親戚や友人が新婚夫婦の部屋におしかけ、からかったり騒いだりする風習）」、「命名」など）は『語絲』で終結することなく、その後中国初の「民俗学会」（中山大學）機関誌『民俗』へと引き継がれている⁴¹⁾。他の同人や読者から広範囲の寄稿と、議論の広がりをもたらず契機を与えたという意味で、また自ずと『語絲』誌面に活気を与えたことも含めて、江紹原の役割は際立っていた。このあたりに南方流の手法と共通するものを認めることは可能だろう。

江紹原はこうして必要な「民間」資料の入手ルートを確保しながら、中国の迷信の定義や分類を試みて、より体系的な研究に着手していった⁴²⁾。その一方で、江紹原が研究対象とした古今の礼のうち、特に「今」に伝わる資料の重要性を彼がどれほど認識していても、書齋を出て実地調査するには至らず、あくまで文献中心型の研究スタイルであった点は押さえておく必要がある。なぜなら、江紹原が周作人の勧めに従い、自著『髮鬚爪——それらに関する迷信』（『髮鬚爪——關於它們的迷信』上海開明書店、1929年）を南方に贈り、それを契機に江紹原と南方の間で書簡のやり取りがなされたのも、その頃だったからだ（1930年5月21日に本を受領した南方が、6月15日付で江紹原に返信し、江紹原から再度南方へ返信した⁴³⁾）。周作人が南方を紹介した、ないしは江紹原から南方にアクセスした背景に、江紹原と南方間に通じる「もともとの」民俗学の道を見て取ることができる。

当時、江紹原からの書簡を喜んだ南方は、「髪を截る妖怪」について、『風俗通』や『太平廣記』記載の補足資料を提供するだけでなく、関連して書いた自分の英文論考を全訳するほか、江紹原に逆質問の形で2つほど教え

を乞うてもいる。一方、周作人と南方に直接のやり取りは認められないが、1926、1927年の周作人日記に刊行間もない『南方随筆』、『南方閑話』、『続南方随筆』が購入された記録がある⁴⁴⁾。当時民俗学者の葉徳均は、江紹原を礼俗迷信研究に専念するよう導いた立役者はほかでもない周作人であり、周作人のもとで活発な活動が可能になった点をクローズアップしながら、「小品」を高く評価した⁴⁵⁾。周作人が江紹原を南方に紹介したのは、その研究スタイルに共通するものを感じてのことだったと考えるならば、周作人の編集した『語絲』に南方流の民俗研究の手法もまた育っていたとみてよい。『語絲』はそうした意味で、『N & Q』と『郷土研究』双方のスタイルを継承しつつ、独自の発展を遂げたものと位置づけられる。

おわりに

近代の学問である民俗学の解釈は、時代、国や地域、さらには個人により異なり、今後もコンセンサスを得ていくことは難しい分野である。また、志村真幸が「もともと民族学は文明社会が未開社会を研究するための学問であった。それに対して、フォークロア研究は文明社会にひそむ原始性へと迫るものである」⁴⁶⁾と指摘するように、本論で取り上げた3人の日中知識人の仕事は、西洋と東洋、文明と野蛮といったものに代表される近代的価値観を問うものでもあった。

文献資料による文化間の比較を通じて、人類の同質性を示すことを目指した南方熊楠。平民の歴史から国民性の創出を目指し、「貴下は、今のごとく便宜に任せて外国のことと比較はまずおき、内地のことについてのみ研究されたし」(1914年5月10日付柳田宛南方書簡)という南方の助言通り、次第に一国民俗学を確立させていった柳田国男。真誠な民の心の中に国民性の原点を見出し、ひいては民間生活の日常の中に特別な趣を発見した周作人。三者三様のアプローチであるが、彼らは全員がラングやフレイザーと

いった西洋の知的源泉を共有しつつ、西洋の学問手法をそのまま自国に展開させようとはしなかった。なぜなら、彼らの学問の根底に根差していたのは、江戸時代の学問の論理、つまり遡れば東洋の学問だったことが要因としてあるからである。「今の眼をもって古のことを断ずべきにあらず」⁴⁷⁾という南方の明言通り、三者はそれぞれ民俗学を通じて、西洋の価値観を相対化しながら近代にとって本質的ともいえる問題に向き合おうとしていたといえる。

そんな彼らが、20世紀初頭の日本民俗学草創期の雑誌『郷土研究』で一堂に「会した」ことを問うことによって、次の2点が明らかとなった。1つは、『郷土研究』は東洋の学問の枠組みを発展させ得る形で、新たな近代的学問である「民俗学」の誕生を促したことから、東洋の伝統的学問と西洋近代の新しい学問の手法が、交差し共存し得た場であったという点である。さらに周作人自ら編集した『語絲』は、『郷土研究』の手法を中国で継続発展させた点で、彼を取り巻く人々や、『語絲』で展開された民俗学研究を中国民俗学史、及び思想史の中に位置づけ、評価する必要性もまた浮き彫りとなった。

もう1つは、近代中国では日本を経由して西洋の学問が誕生した学問の系譜があり、そのプロセスを検討することが、翻って中国伝統学問が西洋でどのように受容されたか、また西洋近代の価値観を受容した東アジアでどのような影響力を有したかを知る契機となる点である。それを解く1つの鍵として、日本を通じて西洋近代の学問を広く学んだ周作人が、ヨーロッパの学問をいかにして中国に伝播させたか、その過程で中国伝統学問は西洋近代とのせめぎ合いの中でいかに機能したのか、という点に今後も注目していきたい。

注

- 1) 中国民俗学の発展の経緯に関しては、拙著『近代中国における民俗学の系譜—国民・民衆・知識人』御茶の水書房、2008年、参照。
- 2) 周作人「十堂筆談 九 風土誌」（『新民声』1945年1月16日、『立春以前』所収、『周作人散文全集』9、408頁）。周作人のテキストは『周作人散文全集（全14巻、索引）』广西師範大学出版社、2009年、に拠る。
- 3) 前掲、『周作人散文全集』9、409頁。
- 4) 岩城秀夫「解説」（『五雜組 1（全8巻）』平凡社東洋文庫605、267-268頁）。
- 5) 周作人「広陽雜記」1944年2月12日作（『立春以前』所収、『周作人散文全集』9、132頁）。また周作人の明代文人評価を巡る先行研究としては、呉紅華「周作人の李卓吾評価をめぐって」（『日本中國學會報』第61集、2009年）、参照。
- 6) 周作人「五雜組」（『大公報』1934年6月30日、『夜読抄』所収、『周作人散文全集』6、348頁）。
- 7) 周作人「塞耳彭自然史」（『青年界』6巻1期、1934年6月、『夜読抄』所収、『周作人散文全集』6、333-340頁）、参照。
- 8) 小林武「言語としての南方熊楠—東洋的知のモザイク」（『現代思想』1992年7月号、特集=南方熊楠、77頁）。
- 9) 飯倉照平「熊楠の親しんだ中国の古籍」（『南方熊楠の説話学』勉誠出版、2013年、158頁）。また飯倉照平より早い段階で大林太良が、「南方の学問の根底にあるのは、むしろ江戸時代の学問、ことに町人の中で発達したエンサイクロペディックな範囲と内容をもった考証の学問ではないかと思われる。」（大林太良「南方の学問的系譜と民族学」、『南方熊楠全集』3、平凡社、1971年、608頁）と指摘し、近世隨筆の考証学の延長に南方を位置づけている。また、日本における中国からの文化の流入と受容に関しては、伊藤真美子「19世紀日本の知の潮流—江戸後期～明治初期の百科事典、博物学、博覧会」（新潟大学『19世紀学研究』6巻、2012年3月）、参照。
- 10) 周作人が所蔵した『郷土研究』の詳細は不明だが、日記には1914年11月21日に郷土研究社へ手紙を書き、翌年の1月15日に20冊受領。その後1916年4月5日「相模屋へ書簡送付、来月より『郷土研究』を以て『白樺』に変更する」と記録がある点から、『郷土研究』が休刊するまで関心を寄せていた可能性が高い（拙稿「周作人・民俗学関連書講読年表（1912-1934年）」、『中央大学論集』第40号、2019年2月、参照）。
- 11) 今日南方邸には、彼が大英博物館で渉猟した足跡として膨大な読書ノート（52冊の通称「ロンドン抜書」）が残されている。英・独・仏・伊・西語で書

- 写された文献の中は、東南アジア、欧州から新大陸に至る各種の地誌や民間伝承資料が含まれる。南方にしても英国滞在の目的は「ロンドン拔書」のためだと陳述していた（南方熊楠著、松居竜五訳「英国博物館理事会宛陳状書（1898年12月7日付）」、飯倉照平・鶴見和子・長谷川興蔵編『熊楠漫筆—南方熊楠未刊文集』、八坂書房、1991年、所収）。関連する先行研究としては、松居竜五「形成期の南方学」（『現代思想』1992年7月号、特集＝南方熊楠）、参照。
- 12) 南方熊楠に関しては、鶴見和子『南方熊楠』（講談社学術文庫528、1981年）ほか参照。またロンドン時代にラング邸の近くに住んでいた南方は紹介状を貰っていたが、結局ラングと会わずじまいだったという。南方熊楠「南方随筆（『郷土研究』第一巻第二號を読む）」（『郷土研究』第1巻第3号、1913年5月）。また、南方熊楠とフレイザーの関係については、増尾伸一郎「形成期の日本民俗学とヨーロッパ—J・G・フレイザー『金枝篇』とその周辺」（堀池信夫総編集『交響する東方の知—漢文文化圏の輪郭』明治書院、2014年、所収）、参照。
 - 13) 近年、南方の英文論考が邦訳され容易に読むことが可能になった。飯倉照平監修『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』集英社、2005年。飯倉照平監修『南方熊楠英文論考〔ノーツ アンド クエリーズ〕誌篇』集英社、2014年。
 - 14) 南方には欧米人が扱えない漢籍や日本の古典にアクセスでき、英語で紹介できる強みがあった。『ネイチャー』や『N & Q』における南方の立ち位置については、志村真幸「南方熊楠のカニバリズム—モースの大森貝塚からロンドンへ」（橋本一径編『〈他者〉としてのカニバリズム』水声社、2019年、所収）、志村真幸『南方熊楠のロンドン—国際学術雑誌と近代科学の進歩』慶應義塾大学出版会、2020年、参照。
 - 15) 南方熊楠論考の掲載について、『ネイチャー』は在英38本、帰国後12本、未掲載5本（1893-1913年）。一方『N & Q』は、在英16本、帰国後308本、未掲載70本（1899-1933年）と、明らかに発表の場を『N & Q』へと移動させたことがわかる（前掲、『南方熊楠英文論考〔ネイチャー〕誌篇』、『南方熊楠英文論考〔ノーツ アンド クエリーズ〕誌篇』、参照）。
 - 16) 『N & Q』は1910年頃のピークを境に購読者数や投稿が減少する。その後、存続の危機を乗り越えて、戦後は時代の潮流に合わせて変化しながら経営を維持した。現在は英文学の専門誌へと変身をとげて、なお権威ある雑誌として継続する。
 - 17) 1911年3月26日付柳田宛南方書簡（飯倉照平編『柳田国男・南方熊楠往復書簡集（上）』平凡社ライブラリー52、1994年、26頁）。本文引用の柳田・南

- 方往復書簡の引用は本書（上・下）による。
- 18) 志村真幸「南方熊楠と『ノーツ・アンド・クエリーズ』誌—‘Footprints of God, &c.’から「ダイグラホウシの足跡へ」（『ヴィクトリア朝文化研究』7, 2009年11月）、参照。
 - 19) ①1900年9月1日号（ノート）、②1900年9月22日号（ノート）、③1900年10月27日号（ノート）、④1903年5月9日号（リプライ）、⑤1904年7月23日号（ノート）（前掲、『南方熊楠英文論考〔ノーツアンドクエリーズ〕誌篇』、参照）。
 - 20) 前掲、『柳田国男・南方熊楠往復書簡集（上）』75-76頁。
 - 21) 南方・柳田論争に関しては、柳田国男研究会編著『柳田国男伝』（三一書房、1988年）、赤坂憲雄『一国民俗学を越えて』（五柳書院、2002年）ほか参照。
 - 22) 前掲、『柳田国男・南方熊楠往復書簡集（上）』215-216頁。
 - 23) 周作人とラングヤフレイザーの関係については、拙稿「周作人と柳田国男—それぞれの民俗学」（中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第69号、2010年9月）、拙稿「周作人とA・ラング—童話への理解」（斎藤道彦編著『中国への多角的アプローチ』中央大学出版部、2012年、所収）、拙稿「周作人の人類学受容をめぐる—考察—フレイザーの受容から「鬼」の言説の創出へ」（『中央大学論集』第36号、2015年2月）、参照。
 - 24) 前掲、『柳田国男・南方熊楠往復書簡集（下）』18頁。
 - 25) 1912年4月1日付高木宛南方書簡（『南方熊楠全集』8, 1972年、平凡社、512頁）。
 - 26) 前掲、『南方熊楠全集』未収の南方・高木往復書簡は、飯倉照平編「南方熊楠・高木敏雄往復書簡」（南方熊楠資料研究会編『熊楠研究』第5号、2003年3月）参照。高木は『郷土研究』創刊の1年後に同誌を去り、ほぼ同時に南方との文通を終えている。
 - 27) 「紙上問答」は第3巻第12号（1916年3月）で中止された。その理由は、「近頃質問ばかりたまつて、どの方面からもとんと應答が來なくなつた。かくべつえらい難題が續出したわけでも無いから、是は幾分讀者間に不人望になつたのだらうと考へ」たことによる。しかし「讀者交詢の必要」と、それを仲介するのがこの雑誌の任務の1つである姿勢は変わらぬこと、その任務は今後「小通信」が担うことで、「此欄を變化のある自由な雜談會として置きたい」とした（「小通信」第4巻第1号）。残念ながら『郷土研究』はその後、第4巻第12号（1917年3月1日）をもって休刊となった。
 - 28) 拙稿「文学の生まれる場—周作人にとっての『遠野物語』」（『文学の力、語りの挑戦—中国近現代文学論集』東方書店、2021年、所収）参照。

- 29) 周作人「幼小者之声」1935年10月27日作、『苦竹雜記』所収（『周作人散文全集』6, 818頁）。周作人が入手した柳田作品で確認できるものは、『石神問答』（1910年）,『遠野物語』（1910年）,『山島民譚集』（1914年）,『郷土誌論』（1922年）,『祭礼と世間』（1922年）,『海南小記』（1925年）,『山の人生』（1926年）,『雪国の春』（1928年）,『民謡今と昔』（1929年）,『蝸牛考』（1930年）,『小さき者の声』（1933年）,『日本の祭』（1942年）,『先祖の話』（1946年）にのぼり、柳田民俗学の主たるものをほぼ網羅する（前掲、拙稿「周作人・民俗学関連書講読年表（1912-1934年）」、参照）。1940年代に周作人と交友のあった直江広治もまた、周作人が「柳田先生のは殆ど全部読んでみられるのには驚きます。」（直江広治「會員通信」,『民間傳承』第10巻第5號, 1944年5月, 54頁）との感概を残している。
- 30) 前掲,『周作人散文全集』6, 822頁。
- 31) 菅沼可児彦（柳田国男）「郷土誌編纂者の用意」（『郷土研究』第2巻第7号, 1914年9月）,「郷土の年代記と英雄」（第2巻第8号, 1914年10月）,「村の年齢を知ること」（第4巻第1号, 1916年4月）,「村の成長」（第4巻第4号, 1916年7月）。以上の論文は、柳田国男『郷土誌論』（爐辺叢書, 郷土研究社, 1922年）に収録された。
- 32) 『語絲』は大きく北京時代と上海時代に分かれる。周作人は北京時代の主たる編集者だった。詳細は、拙稿「『語絲』について—誌名の意味と編集者」（『お茶の水女子大学中国文学会報』第18号, 1999年4月, 所収）, 参照。
- 33) 魯迅「270817致章廷謙」（『魯迅全集』12, 人民文学出版社, 2005年, 65頁）。
- 34) 周作人「一点回憶」（『周作人散文全集』13, 872頁）。
- 35) 周作人は「酒後主語8 關於『猥褻歌謡』」（『語絲』第99期, 1926年10月）の中で、猥褻な歌謡の収集が進めば小冊子（『猥褻歌謡集』, 『猥褻語彙』）の出版を公言していたことから、必要な原稿はすでに揃ったこと、しかしながら1926年段階では諸般の事情からその希望がなくなってしまったと報告した。その上で、決して諦めず、今後機会を見て速やかに出版することを約束した（がその後も出版は叶わなかった）。
- 36) その後、1929年『大黒狼的故事』と題され亜東図書館より出版された。周作人が序を書いている。谷万川については、飯倉照平「柳田国男・周作人・谷万川」（『中国民話と日本—アジアの物語の原郷を求めて』 勉誠出版, 2019年, 所収）, 徐從輝「周作人与北方左聯—以周作人与谷万川为中心」（『新疆大学学报（哲学・人文社会科学版）』第42巻第1期, 2014年1月）参照。
- 37) 周作人「我的雜学（十四）」（『古今』第52期, 1944年8月, 『苦口甘口』所収, 『周作人散文全集』9, 221頁）。

- 38) 詳細は前掲, 拙著『近代中国における民俗学の系譜—国民・民衆・知識人』, 参照。
- 39) 「礼部文件」の具体的なやり取りに関しては, 小川利康「『礼部文件』における江紹原のスタイル」(早稲田商学同攻会『文化論集』11, 1997年), 参照。
- 40) 前掲, 拙著『近代中国における民俗学の系譜—国民・民衆・知識人』所収, 【資料Ⅱ】江紹原資料③「小品」目録, 参照。「小品」にはまた, 140編以上にのぼる「中国人の西洋医薬と医学に対する反応」(小品251-394)がある。詳細は拙稿「中国伝統医学は科学か迷信か—江紹原による民俗学的アプローチの検討」(土田哲夫, 子安加余子編著『近現代中国と世界』中央大学政策文化総合研究所研究叢書27, 中央大学出版部, 2020年, 所収), 参照。
- 41) 『語絲』第99, 103, 105, 107, 120, 140, 143, 150期, 及び『民俗』第9, 23・24合併号, 35, 38, 40期他での各議論参照。
- 42) 江紹原は中国で初めて「迷信研究」の講義(中山大学1927年, 北京大学1929年)を行った人物でもある。講義内容は『中国礼俗迷信』(王文宝整理, 渤海湾出版公司, 1989年)と題され, 彼の没後に出版された。
- 43) 江紹原と南方の書簡のやり取りについては, 小川利康「中国の民俗学者江紹原と熊楠」(『文学』季刊第8巻第1号, 1997年冬, 所収), 参照。
- 44) 前掲, 拙稿「周作人・民俗学関連書講読年表(1912-1934年)」, 参照。周作人の南方に対するまとまった言及は残されていないが, 南方と周作人は宮武外骨評価において共通点がある。その点に関する検討は今後の課題としたい。
- 45) 葉徳均「中国民俗学研究的過去及現在」(『草野』5-3, 1931年4月)。
- 46) 前掲, 志村真幸「南方熊楠のカニバリズム—モースの大森貝塚からロンドンへ」81頁。
- 47) 1927年4月28日付西村真次宛南方書簡(前掲, 『南方熊楠全集』8, 615頁)。

